

アンケート調査による若者が抱く地下空間イメージに関する検討

福岡大学工学部 正会員 ○ 今泉 暁音
 日本生命保険相互会社 非会員 小山田 彩加
 福岡大学工学部 正会員 坂田 力
 山口大学理工学研究科 学生会員 伊藤 裕美子
 山口大学理工学研究科 正会員 清水 則一

1. はじめに

地下空間に対して、人々は一般的に暗い・狭い・怖いなどというイメージを持つため、心理的な側面を考慮して地下空間利用を検討することが重要である¹⁾。そのため、多くの心理的なイメージに関する調査・検討が行われ²⁾、最近ではその成果を踏まえた魅力的な地下空間デザインがなされている。

したがって、地下空間のイメージはかつてに比べて変化してきたのではないかと考えられる。特に、比較的新しい地下施設を中心に利用してきた若者の地下に対するイメージについて把握することは、これからの地下空間デザインにとって重要である。そこで、本報告では、若者を対象に各種地下空間のイメージに対するアンケート調査を行い、若者が抱く地下空間イメージの現状を検討する。

2. アンケートの方法

評価対象とする地下施設は、地下街、地下通路、地下鉄の3種とし、日常漠然と抱くイメージを調査するため具体的な施設名称を挙げず、写真なども提示しないこととした。なお、最後に具体的な施設を思い浮かべたかを問う設問を設けた。

3種の地下施設のイメージを調査するために、SD法に基づき図-1に示すように計13種類の形容詞対の評価尺度に対し、「非常に」「かなり」「少し」「どちらでもない」で表現される1～7段階のスケールを与えて回答を求めた。また、イメージに加え、利用頻度等の設問も設けた。

調査対象者は福岡県内(113名)、及び、山口県内(35名)の学生計148名であり、調査時期は2012年11月である。アンケート調査項目の概要を表-1に示す。

3. アンケートの結果と考察

3.1 平均的イメージと具体的イメージ対象の有無

図-1は、各施設の回答時に具体的な施設の思い浮かべたかという問に対する回答別に各形容詞尺度の平均値をキーワード：地下空間、イメージ、アンケート、利用頻度

示したプロフィール図である。各形容詞尺度上で良いイメージで捉えられる側を7、悪いイメージで捉えられる側を1として示す。また、<>内に全回答者の平均値を示す。

平均値を見ると、(b)地下通路では「迷いにくさ」「使いやすさ」「落ち着き」以外では評価値は4未満であり全体的にネガティブなイメージの傾向がある。(c)地下鉄では「開放的な」「広々とした」「落ち着き」、(a)地下街ではこの3尺度に加え「迷いにくさ」において評価値は4未満であるものの他の尺度では評価値は4以上であり、概ね良好な評価である。しかしながら、空間の広がりに関してはややネガティブなイメージを持っているようである。

具体的イメージ対象の有無による評価の違いについて、t検定(有意水準5%)より(a)地下街の「にぎやかさ」、(b)

表-1 アンケート調査項目の概要

評価施設	地下街、地下通路、地下鉄の3種
調査項目	・利用頻度(大学入学後、及び、入学前) ・個人属性(男・女) ・イメージ(SD法、7段階) ・具体的な施設を思い浮かべたか など

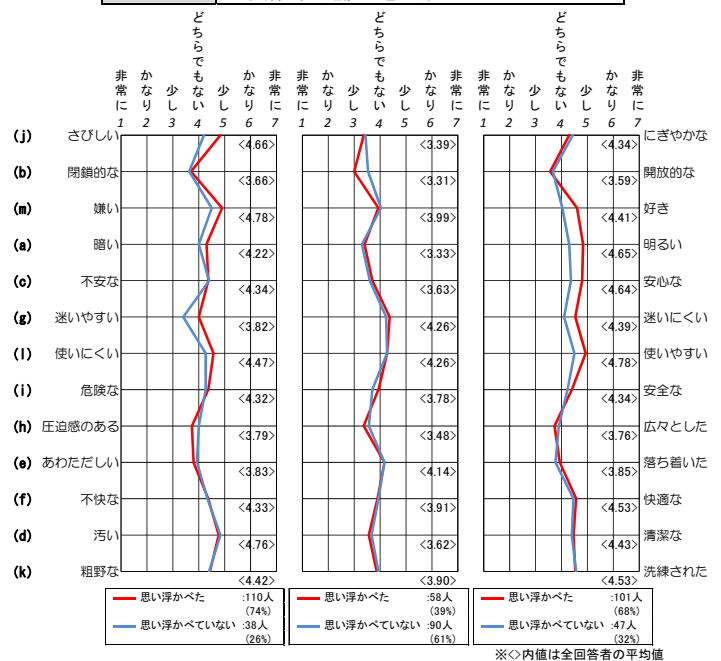


図-1 具体的イメージ対象の有無別プロフィール

連絡先 : 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8-19-1 福岡大学工学部社会デザイン工学科 TEL092-871-6631(内線 6493)

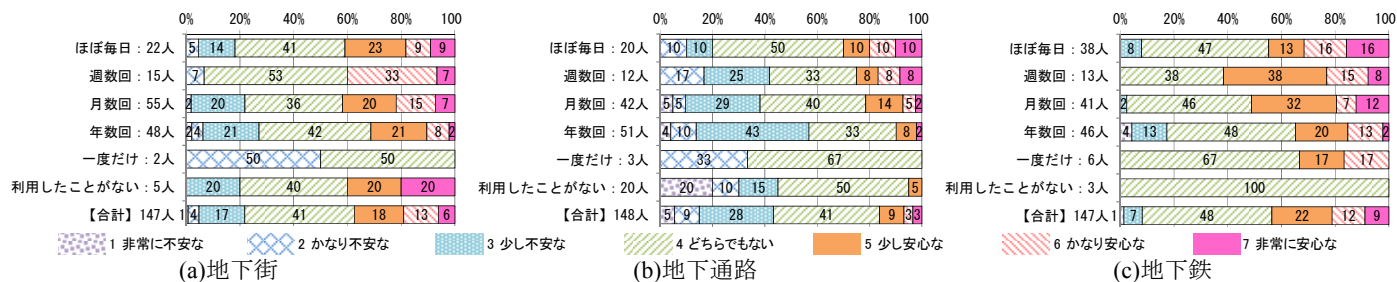


図-2 安心感(不安感)の利用頻度(大学入学後)別の回答割合

地下通路の「開放感」、(c)地下鉄の「好嫌度」「明るさ」「安心感」で具体的イメージ対象の有無の間に有意差が見られた。(a)地下街の「にぎやかさ」、(c)地下鉄の「好嫌度」「明るさ」「安心感」では、具体的施設を思い浮かべた人がよりポジティブなイメージを抱くようである。一方、有意差が確認された(b)地下通路の「開放感」をはじめ、3施設の「広々とした」など空間の広がりに関する評価においては、具体的施設を思い浮かべた人がよりネガティブなイメージを持つ傾向が示された。

また、図-1の凡例中に具体的な施設を思い浮かべたかという設問に対する回答人数、及び、回答率を示す。(a)地下街、及び、(b)地下鉄においては70%程度の人が具体的な施設を思い浮かべたとしているのに対し、(b)地下通路では40%程度と思い浮かべた人の割合は少ない。

3.2 安心感(不安感)

ここでは、地下におけるイメージとして挙げられることの多い「安心感(不安感)」を取り上げる。図-2に利用頻度別の形容詞対「不安な-安心な」に対する評価値の回答割合を示す。なお、利用頻度は大学入学後のものであり、また、利用頻度が「その他」であったデータは省略した。

(c)地下鉄では全体の90%以上が評価値4(どちらでもない)以上と回答しており、「安心な」イメージを抱く人が多い。(a)地下街においても評価値4以上は80%以上と概ね良好なイメージである。(b)地下通路は40%程度の人が評価値3(少し不安な)以下と評価し、地下街や地下鉄に比べると不安なイメージを抱く割合が多い傾向が示された。また、利用頻度別の回答割合を見ると(b)地下通路、及び、(c)地下鉄では、利用頻度が多くなるほど、評価値5(少し安心な)以上に回答している割合が多くなる傾向にあるようである。

3.3 利用頻度による各種イメージ

図-3は、各施設、各形容詞対の利用頻度毎の平均値を示したプロフィール図である。いずれの施設においても、利用頻度が多いほどポジティブ側に、利用頻度が少ないほどネガティブ側に位置している傾向が見られる。特に、

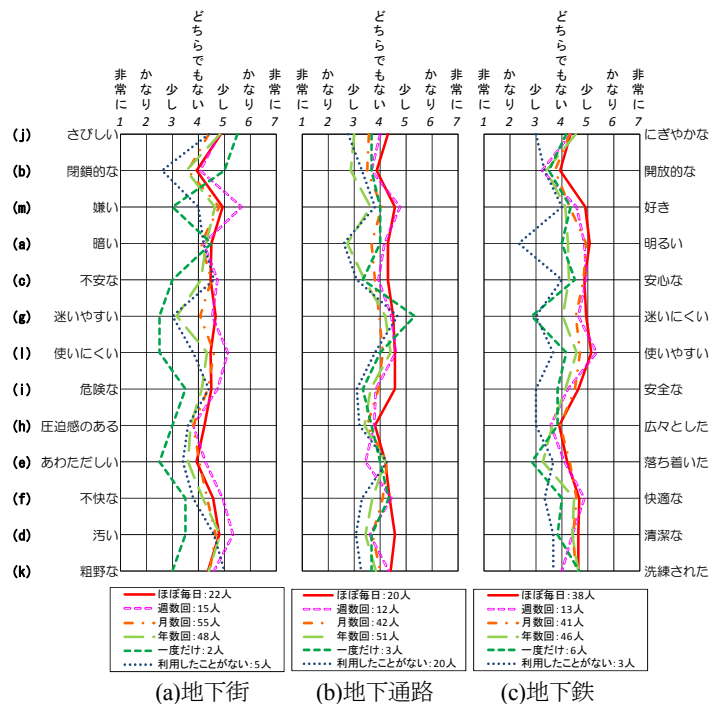


図-3 利用頻度(大学入学後)別プロフィール

(a)地下街や(c)地下鉄の「迷いにくさ」、(b)地下通路や(c)地下鉄の「明るさ」で利用頻度によってイメージの差が大きいことが分かる。

4. まとめ

本報告では、若者が日常漠然と抱く地下のイメージを検討するためにアンケート調査を実施し、その結果について検討を行った。

地下街・地下鉄のイメージは概ね良好であるものの空間の広がり感に対してはややネガティブなイメージを持つようである。また、利用頻度が多い人の地下に対するイメージはポジティブである傾向が示された。潜在意識として地下にネガティブなイメージを持つが、心理的イメージに配慮された施設を実際に利用することによって、ポジティブなイメージに移行できる可能性が推測される。

謝辞: アンケートに協力して頂きました多くの方々により感謝の意を表します。

参考文献:

- 1) Carmondy, J. and Sterling, R.: *Underground Space Design*, Van Nostrand Reinhold, 1993.
- 2) たとえば、土木学会地下空間研究委員会研究成果報告書, 2002, 2005, 2008, 2011.